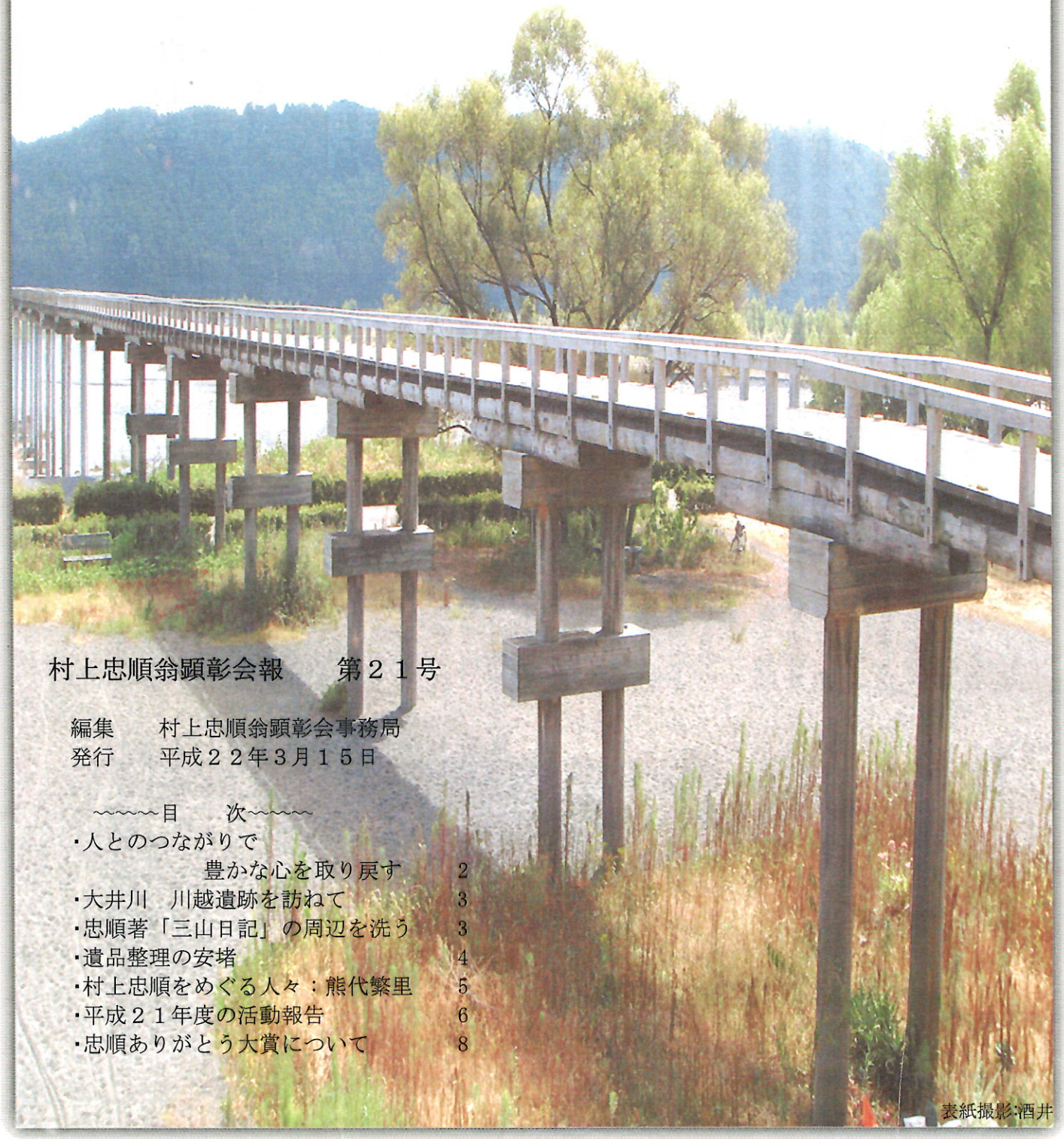
村上忠順翁顕彰会報



村上忠順翁顕彰会報　　第２１号

編集　　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　　平成２２年３月１５日

～～～～～目　　次～～～～～

・人とのつながりで
　　豊かな心を取り戻す　　2
・大井川　川越遺跡を訪ねて　　3
・忠順著「三山日記」の周辺を洗う　　3
・遺品整理の安堵　　4
・村上忠順をめぐる人々：熊代繁里　　5
・平成２１年度の活動報告　　6
・忠順ありがとう大賞について　　8

表紙撮影:酒井

人とのつながりで 豊かな心を取り戻す

村上忠順翁顕彰会　会長　近藤光良

平成二十二年は、新年を迎えてから寒い日が続く年となりました。最近の中では寒さの厳しかった新年でしたが、今から十年以上前ではこの寒さは通常の寒さであったような気がします。確実に地球の温暖化が進んできていることを感じさせる新年でもありました。会員の皆様におかれましては健やかな日々をお過ごしのこととお慶び申し上げます。

平成二十一年度を振り返ってみますと多くの変化が起こりました。残念ながらアメリカに端を発した経済不況は日本経済にも大きな影を落としました。こうした影響もあり、日本の政権は戦後初めて大きな交代をすることとなりました。

日本を除く外国経済は徐々に回復傾向にありますが、残念ながらわが国の経済は、依然として大きな不安を抱えたままです。社会が不安定になっていることは誰しも感じていることだと思います。特に最近の出来事を見ていると、経済的に豊かな層と極貧の層、人・金ともに恵まれた中央と貧しい地方といった格差社会を感じるようになってきました。こうした背景の中で起こる事件は、自分さえ良ければいい、という相互に助け合うという姿が薄れつつあることを感じさせます。経済的に豊かであっても、心の豊かさが欠如してきているような気がします。

このような社会状況の中で、ＮＨＫは大河ドラマとして坂本竜馬を取り上げました。また、昨年末には明治時代から大正、昭和への社会派ドラマとして「坂の上の雲」を放映しました。まさに村上忠順たちが社会変革に奔走している時代の物語ばかりです。これらの物語は、江戸時代というぬるま湯から抜け出し新しい社会へ、そして広く世界を見据えて力強く自分たちの意思を実現していこうとする誇るべき日本人の姿を描いています。

彼らの成長と成功への影に、彼らを取り巻く家族や友人たちといった多くの人たちが描かれていることも見過ごせません。豊かな心は決して豊かな経済とは一致しているとは限りません。人生の目標に向かって、相互に支えあえる多くの人間関係、あくせくせずにゆったりとした自分の時間を持てる生活環境、そして適度な経済状況があったときに人生の豊かさを感じるのではないでしょうか。

「忠順ありがとう大賞」も財政的に厳しいながら、賛助会員である企業の皆さんを始め、多くの皆様方のご支援により第四回めを迎えることができました。日常生活の中で、「ありがとう」といえる環境、口に出せなくても心の中で「ありがとう」と言いたくなるような豊かなひと時を大切にしたいと思います。

平成二十二年も昨年同様厳しい社会状況であると思います。このような時だからこそ、村上忠順翁顕彰会の会員の私たちは、幕末の忠順たちの思いに心を馳せ、多くの人々とネットワークを結び、くよくよせず、広い心で、家庭や地域社会と積極的にかかわっていきたいものです。そして、明るく、豊かな毎日を送っていただけることと期待し、新年度の挨拶といたします。

大井川

川越遺跡を訪ねて

近藤秀夫

木犀香る朝、六鹿会館の駐車場へ午前八時半に集合し、トヨタ自動車のご好意の大型バスに乗り、四十余名の一行は東名高速を一路島田市に向かった。

忠順会の歴史探訪には、初回からほとんど参加してきた。いつも、忠順さんについて思うことは、健脚であったこと。昔の人は歩くしか方法はなかったが、一日に四十キロ歩くのは大変だったと思う。次に、行く先々に友人、知人がいて、正確で質の高い情報が得られたこと。その上に、旅の日記が詳細に記録されていて、実に筆まめな人であったことである。私も忠順さんにあやかって、運動して汗をかき、人中に入って恥をかき、字を書いて呆け防止につとめようと思いつつ……。

旅は道づれと言うがよき友と同席し、四方山話をしているうちに島田市博物館に到着。門を入ると、芭蕉の句碑があった。「ちさはまだ青葉ながらになすび汁」（チシャ菜は花も出ない青葉であるのに、もうなすびの汁でご馳走になった）博物館に入ると、「川越し」の展示である。「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」馬子唄にも歌われた東海道の難所である。大井川を渡るには「川札」を「川会所」で買い、川越人夫に手渡して、人夫の肩や連台に乗り川を越した。川札の値段は毎朝、水深を測って定めた。水深が脇通し（百三十六センチ）を越すと「川留め」となった。人足の肩車で越す場合は川札一枚で四十八文（約一四四〇円）連台で越すと、一人乗りで、担ぎ手四人は川札四枚と連台の札二枚の計六枚（約八六四〇円）であった。川越には高い金と、時には命がけのこともあった。

昼食は蓬莱橋のたもとでとり、橋の渡りはどまん中で折り返した。帰りは牧の原の広くきれいに刈りこまれた茶畑を通り、金谷の宿、小夜の中山、日坂は車窓から見学をし、最後はトヨタ会館の見学をした。

本町の台地から秋の夕映を眺め、五時過ぎ六鹿会館についた。

おわりに、事務局の皆さんの綿密な計画と心温まるお世話をいただき厚くお礼申し上げ、今後のご活躍を祈念します。

長らえて忠順さんの足跡を
訪ねて歩く至福のひと日
（秀夫）

蓬莱橋前

忠順著「三山日記」

の周辺を洗う

近藤鮭司

①　ご存知「三山日記」は、天保十年（一八三九年）四月忠順が、秋葉山を巡ったときの日録である。当時の忠順は、連合いを得て長女年之らに囲まれ、充実した日々を送っていた。父忠幹も侍医になって十年、狂歌の評者としても絶頂期にあり、家族ともども順風満帆な春の陽射しの中にあった。

②「三山日記」の「三山」は、いずこ

故簗瀬一雄氏によると、「三山日記と名づけたのは、宮路山・鳳来寺山・秋葉山を巡ったからだろう。」と言及してみえる（『村上忠順集』解説二四三ページ）。また、『村上忠順展の陳列目録』にも、「宮路山・鳳来寺山・秋葉山の三山を巡った紀行日記」と解説されている。

果たして、そうなのか。私は、この「三山」は、「円福山妙厳寺（豊川稲荷）・煙巌山鳳来寺・大登山秋葉寺」の「三山」だと読む。マウンテンの「山」ならば、紀行中に踏破した鳳来寺山・秋葉山・光明山の三山を挙げるべきで、宮路山は「定かならず、いずこなるなむ」と遠望し、一瞥して通り過ぎている。この紀行の「三山」は、「仏寺の称号としての山」の意と解するのが妥当であろう。

③　慰め顔の「かはづ」

旅も三日目、大野（新城市）を早朝に出立、昼なお暗き奥三河の山路を越え、急峻な遠州石打村を過ぎたころ、忠順は、慰め顔にころころとなく「かはづ」に興味をおぼえ、や

っと捕らえて器に入れ、懐に忍ばせて旅を続けた。

道中、時おり鳴くので水を換え、虫を与えて「生きてあれかし」と祈った。幸い生きながらえ共に秋葉山詣でをし、ふるさと新馬場に帰省する。早速、大きな甕の中に石や水を入れて放つと、心地よげにしている。夜になり雨が降ったので外に出し、覆いを被せておいた。翌朝、重石はあるのに、あの蛙の姿は見えず、「口惜しきこと限りなし、もと居た山に帰ったのか」と想いを馳せる。

慰め顔に「ころころと鳴く」ご仁は、無論、清流に住むカジカ蛙だ。その慰め顔に愛着を覚え、蛙を友とする旅人こそ、独り旅の透徹した瞳で蛙を見つめる忠順である。

④ どの山路を越えたのか

忠順が鳳来寺から遠州に向け秋葉街道を越えていた時分、奥三河の静寂なしじまにある川宇連村と大平村にも、熱き闘いがあった。

当時は、お陰参りの第六波が巷に押寄せ、東海道も掛川―秋葉山―鳳来寺―豊川―御油のルートが確立し、秋葉信仰の熱気で溢れていた。かの川宇連村でも、日に数千人の信者が、秋葉街道を埋めていた。隣り村の大平から秋葉街道筋の利権を手にした川宇連村は、数多くの道者の収益に潤っていた。が、大平村も古道を再開して復権を訴え、川宇連村から、年十両の利権補償を得た。そのたびに、山越えの道筋も二転三転することとなった。果たして、忠順が旅した天保十年は、三コースあった山道の内、どの山路を越えて遠州神沢に辿りついたのか、これまた興味のあるところだが、何はともあれ、今は、獣道化している。

⑤ さて、忠順を秋葉路に向かわせたものは

誕生日の四月一日、満二十七歳を迎えて、私的には輝いた光のなかにあった忠順一家である。何が、火伏の神詣でに秋葉街道へ誘ったのか。吟行の旅か、長男忠国出生への祈願か。

数年続いた飢饉に加え、物価高騰の嵐も吹き荒れ、加茂の騒立ちや天草の乱等々揺れに揺れていた時期だ。わが逢妻川の大曲でも、農民の死に物狂いの水盗り合戦が勃発していた。世はまさに騒乱の御世にあった。

矢作新堀村の深見家にも寄らず帰省した独り旅の発心は、今も謎に包まれている。

遺品整理の安堵

村上家当主　村上 斎

土蔵と云う建物は、何かにつけ非常に優れた使い勝手がよく、永年にわたる保存には、優れものである。特に、地震には強く、三河の大地震でも、ほとんど影響がなかった。あらゆる物の保管には、これ以上の物はないでしょうが……。が、条件がよいのを理由に、一般の物置小屋扱いの現状となっている。内輪のことを云えば、恥を曝すことになるが、大戸を開けると、通路は狭く、蟹歩きとなる程、物が溢れている。これが実状である。中には、ゴミ同然の物も沢山ある。毎回開ける度に何とかしなくてはと……、何れ歩けなくなるだろうと思いつつ放置してきた。

誰かが犠牲にならなければと、立ち上がった。始めたら、物凄い「ほこり」が舞い上がり、直ぐさま、マスク、軍手をし、頬被りをして、準備万端ととのえた。棚の高さも背丈位で、脚立がいるかどうかの高さ、無しでいこうと決める。書類入れの箱より大きめの柳行李と、同大の木箱を下ろす準備にかかる。箱によっては、あふれている箱もあり、二～三箱を少しずつ下ろすことにした。角度を変えず、静かに持ち下ろす。時折バランスを崩し、百二十数年間の放置の天井からの細かな土、ネズミの糞、綿埃等々が、頭上から落下、その時の気持ちの悪いこと、もう止めようかと何度思ったことか分からない。忠順を愛するが故に、資料を永遠に眠らせる訳にはいかない、続行するのが当然であろう。

土蔵は、小さな明かり取りの窓が二ヶ所で、薄暗い室内である。いったんほこりが舞い上がれば、息苦しいし、眼も痛い、乱暴な動きは出来ない。兎に角、静かにそのままの状態で屋外へ運び出すほかはない。階段は垂直に近い、となれば当然、踏み代は極端に狭い、蟹歩きしなければならない。手ぶらでも危険を伴う、況して、両手で箱を持ち下りる。苦労の連続であったが、無事に出すことが出来た。

次号に続く

千巻舎（ちまきのや）

村上忠順をめぐる人々

熊代繁里

東京都立小岩高等学校教諭
学術博士　中澤伸弘

一、

熊代繁里は紀州田辺の国学者、歌人で本居大平門下の同郷の山内繁樹に学んだ。また若山の加納諸平、本居内遠の教へも受けたので、学統は本居国学派の一人と言へる。田辺藩の国学教授を経て、明治維新以降は、紀州の熊野本宮大社の宮司の要職を勤め、明治九年六月に五十九で逝いた。繁里の「門人録」（南紀文化財研究会刊）を見ると、忠順は安政七年（万延元年）に繁里のもとへ入門してゐる。その時に繁里は四十三歳、忠順は四十九歳であつて、忠順の方が六歳年長であつたが、最後まで繁里を師として崇めたのであつた。

忠順はこれ以前の嘉永二年に本居内遠の門に入つたが、内遠はその後の安政二年に逝いた。忠順が本居派の繁里の門に入るのは内遠の死と言ふ事と関係してゐるのだらう。この間の安政五年に繁里は『類題和歌清渚集』を刊行した。これは同じ紀州の加納諸平による『類題和歌鰒玉集』が諸平の死により七編で頓挫したあとを受ける形のもので、ここに忠順の歌が採られてゐることが、或いは入門の動機でもあつたのだらう。忠順の採られた歌数は一首（年内立春）と少ないが、自ら歌稿を送つたのか、歌が繁里の目に触れたのかは定かではないが、全国歌人の歌が載る歌集に採られたことは忠順の誉れでもあつたし、このことが爾後『類題玉藻集』を編む契機となつた事と思はれる。

二、

入門以来、終始門人の立場を貫いた忠順の許には、繁里からの書翰が多く届いた。尤も筆まめな忠順はことある毎に繁里に書翰を出したのであらう。今、村上家には百通余りの繁里の書翰が残り、幕末から明治維新後と言つた激動の時代を生きた国学者の姿が伺へるものである。ここではその中で最古のものにあたる、安政七年二月の書翰を紹介する。本文には年号が書かれてはゐないものの、書翰の裏隅に忠順の筆跡で「安政七年二月出」とあることによつた。先にも述べたが忠順の繁里入門はこの年であるが、その月は不明である。だがこの書翰からはこれ以前からの交流があつたことが伺へるのである。

書翰は「正月七日之御翰難有拝見」と始り、型通りの新年の挨拶が述べられ、「二月十五日　村上大翁」と書かれその後に近況が「二白」として追記の形で書かれてゐる。忠順はこの年の一月七日付けの手紙を送り、これはその返事であつた。忠順の方が年齢が上であつた関係からか宛名が「村上大翁」と書かれてゐる。五十歳以前でも翁であつた。（判読不明のものは□とした）

二白　御細書之趣逐一拝誦仕候然者二村山の考意奉畏候　右者是方の□二付定而麁漏なれと存候得共まづ可也二奉存　揃詞花の注二加申候来春迄竟故清抄仕候二付　其上二而御目掛可申候
随筆三四章呈申処御□下□御返却慥二入手仕候　近日社中二為認亦々呈候可申候

一　今度歌合百番拙判御望二付　例之つまらぬ評認呈申候　誤者見ゆるしたまへ亦々都て御催二も御見せ可下申候　此度の百番面白　殊に長歌今様神楽催馬楽等大二甘心仕候　当地歌合も二冊深見氏迄呈申候　御笑覧可成候

一　御随筆一冊拝見　御論一々殊勝と奉甘心仕候　随門人二直□為写呈申候　近々嚶々筆話之様二仕度候了簡二御座候　則此度御返上申上候後巻亦々御見せ可被下申候

一　御詠草一冊中都而面白事と□□候　仰二随ひ無□□加筆仕候亦々御見せ可下候

一　為御祝儀金弐百疋御恵投被成下不少難有奉存候（中略）

一　拙家月並兼題一葉呈申候　何卒御出詠申上候

三、

右の書翰の内容を見てみよう。

繁里は嘉永七年に勅撰和歌集の一つである『詞花和歌集』の注釈書を書き始めた。この書は明治二年に『詞花集解』と題して成稿したが、生憎刊行はされなかつた。二村山については本会報の前号に紹介したが、地

元の三河尾張境のこの山の考証を忠順は繁里に告げたやうである。そして繁里はそれを認めるとともに「詞花の注」に加筆すると述べてゐる。これは先程あげた書物と思はれるが、『詞花和歌集』には二村山を詠んだ歌がないのが気になる。また繁里が書いた随筆を忠順が見て返却したやうである。忠順は此を高く評価したのであらう。繁里は社中の者に書かせて送ると書いてゐる。

ついで忠順は三河の門人の百番歌合はせの評を繁里に依頼したやうで、それが返却されてきた。また繁里の田辺の門人の歌合はせが、忠順縁戚の深見氏のもとに送つたので「笑覧」してほしいと言つてゐる。更に忠順は自分の随筆を繁里の処に送つたと見え、其れが返され、繁里は幾つか抄録したものを『嚶々筆話』のやうに仕立てる考へがあることを披露してゐる。『嚶々筆話』は大国隆正が編んだ、嘉永期に京都に在住してゐた国学者の短編の随筆を纏めたもので、刊行されてゐるが、繁里の編纂のこれは頓挫したやうである。何にせよ当時の国学者は斯様な考証の短編の随筆を書いてゐて、お互ひに見せあつてゐたことなどが分からう。また忠順は詠草を送り、批評を乞うてもゐる。文末の御祝儀としての金弐百疋は入門の束修であらうか。

まだ正式に門人になつてゐないものの、斯様な親密なやりとりがなされてゐたことは注目に値しよう。

四、

これ以来、三河の忠順は紀州田辺の繁里に師事すること、その死の明治九年まで十六年に亘つたのであつた。

繁里が逝くとそれを悼み、追悼の歌会を開いた。題は「寄花懐旧」であつた。繁里が花蔭、桜蔭を号としたことによる。また翌十年には玉藻集のために送られてきた繁里の歌稿を整理して『花蔭歌集』を編んだ。

（刈谷、村上文庫蔵）その序に「まなびの道ただしく、身のおこなひめでたくして、やまとだましひいみじき人ひとりなむある。そは紀国日高ノ郡三名部人にして、氏を熊代、いへの名を桜蔭となむいふ」「此君をおきては今の世にては大和心たかく大和魂かたく、（中略）まなびの道いたりふかく、歌の道すぐれたる人はあらじとおもふ」と忠順は繁里を国学者として高く評価するのであつた。

この書は大部の歌集なので刊行はされなかつたが、翌十一年十一月に、ここから歌を選んで『桜蔭集』をまとめた。これは三年後の十四年に故橘冬照の妻である橘東世子の序を得て刊行され、忠順のこの労によつて、世に広く繁里の歌と名とを残す事になつた。忠順はこの三年後の十七年に逝いたので、これが忠順にとつて最晩年の編著となり、最後に師繁里の顕彰ができた安堵と、個人による思ひの深かつたことが今も伺へるのである。

平成二十一年度の活動報告

事務局　酒井順子

○四月二十六日

・「忠順ありがとう大賞」表彰式

表彰式の様子

・定例総会

・記念講演

演題「味噌は作らない」

講師　野田清衛氏

（合資会社野田味噌商店

無限責任社員）

野田清衛氏

○七月二十二日

・女性部会研修会

「江戸食文化・岡崎の旅」

参加者三十七名

・トヨタ鞍ヶ池記念館

・岡崎城　八千代本店（昼食）

・八丁味噌カクキュウ工場見学

・備前屋にて研修

『岡崎宿伝馬について』

（講師備前屋社長中野敏雄氏）

・奥殿陣屋見学

（終了後のアンケート結果）

良かった、印象に残った場所は、多い順に、奥殿陣屋・八丁カクキュウ・トヨタ鞍ヶ池記念館・八千代本店でした。

また、次のような感想や意見がありました。

◇日食を見ることができたのは忘れられない思い出となりました。

◇内容盛りだくさんで楽しい一日でした。

◇各場所の時間が足りなかった。

◇備前屋さんの説明がよく聞こえなかったのが残念。

◇あわ雪豆腐の古い歴史が聞けるとよかったと思います。

奥殿陣屋にて

○九月～十二月　第一土曜日　計四回

・四方樹大学

講師　新行紀一氏

（愛知教育大学名誉教授）

テキスト

「村上忠順集　座右記」

「村上忠順集　紀行編

草分衣日記」

参加者延べ六十名

本年度の講義内容は、殿様のお供で江戸に到着してからの江戸滞在中の出来事と、刈谷に向かい江戸を出発し戸塚宿までの様子でした。詳しい内容については、毎年発行している叢書をご覧下さい。

講義風景

○十月二十日

・歴史探訪

「川留め文化を訪ねる旅」

参加者四十一名

・島田市博物館・分館

・川越遺跡見学

・蓬莱橋周辺にて昼食・見学

・金谷宿・小夜の中山・日坂宿

（車窓見学）

・トヨタ会館

（終了後のアンケート結果）

良かった、印象に残った場所は、蓬莱橋と島田市博物館がほとんどでした。

次回訪れたい場所は、京都・秋葉社・大正村・近くでゆっくり見学できるところなどでした。

感想や意見は、次のようでした。

◇見学時間がもう少しあると良かったと思います。

◇感動することがたくさんありました。

◇だったんそばは、それとして結構ですが、いっときに準備しておくような配慮があるとありがたいと感じました。

◇忠順と関連ある展示を会員に知らせるとよい（例えば、みよし市資料館とか、刈谷市中央図書館での催しものを回覧等で）。

◇細かい説明を車の中でして頂き、改めて忠順翁の偉大な人柄を自分なりに少しだけわかってきたような気がします。

島田市博物館にて

○十一月二十三日

・忠順翁命日墓参

○しだれ梅

昨年度、顕彰会二十周年記念行事の一環として、刈谷市中央図書館に

植樹した「しだれ梅」が、二月の中頃に咲き始め、三月の初めには見事な花の時期を迎えました。

三月に会員である石川孔啓氏が木の剪定をして下さいました。

忠順翁の今なお伝わる偉大な足跡のように「しだれ梅」が、この先も、図書館を訪れる皆様の心を和ませてくれるのを願っております。

しだれ梅

平成二十二年二月二十四日
刈谷市中央図書館にて撮影

忠順ありがとう大賞

応募期間　十一月二十三日から
　　一月三十一日
応募総数　千二百九十一首
入賞者　二十四名
選者　永井公博先生

○豊田市長賞（小学生の部）
　堤小二年ふかみしょうせい

パパがきめた
いつもねる前　せいざして
ありがとうの　はっぴょう会

※正座して毎晩のありがとう発表会。素晴らしいことですね。「ありがとう」の声が家中にひびきます。

○豊田市教育委員会賞（小学生の部）
　堤小六年　渡辺あや

ありがとう
世界のみなが　いえるよう
安心できる　みなの地球を

※世界中の人たちが皆「ありがとう」と言えるような地球になってほしいものですね。

○会長賞　金賞（小学生の部）
　堤小一年　なすみなみ

おとうさん
ふたりでねると　あったかい
みなのこころも　ぽかぽかするよ

※お父さんのあったかいぬくもりは、心もあたためてくれるものですね。

○会長賞　銀賞（一般・中学生の部）
　前林町　甲村サカエ

恙（つつが）なく
此の地に嫁（か）せし　五十年
三代連（つら）ね　除夜の鐘撞（つ）く

※三代揃って越年の鐘の撞ける境遇への感謝が込められています。

○会長賞　銅賞（一般・中学生の部）
　扶桑町　吉田八重

年明けて
今年も息災　吾が畑の
野菜は旨し　天地の恵み

※作物は天地の恩恵と、人の丹精の賜物です。特に、吾が家で収穫したものは味わい深いことでしょう。

入賞者の一部の方の作品と永井先生の講評を紹介しました。入賞者全員の作品は、別紙をご覧ください。

選者の永井先生には、毎年無理なお願いをして、選評をして頂き感謝しております。

編集後記

表紙は、歴史探訪で訪れた蓬莱橋で、頂いた資料によると、「平成九年十二月にギネス社より『世界一長い木造歩道橋』と認定され、大井川の自然と一体となった木橋として有名だ。

明治二年七月、最後の将軍徳川慶喜を護衛してきた幕臣たちが、大井川右岸にある牧之原を開拓し、お茶を作り始めた。彼らが島田へ生活用品や食料品を買いに出かけるようになってきた。大井川を渡るのが大変であったため、静岡県令（現在の知事）に橋をかける願いを出し許可され、明治十二年一月十三日に完成した。」ということだ。

忠順翁が土井候のお供で江戸に行った時にこの橋があったのなら、何日も金谷宿に留まることもなく旅を続けられたことであろう。

この会報を発行するにあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝している。

（事務局　酒井）